

北欧
福祉と教育
街歩き

番外編 校長の挫折と希望

蘭部英夫=文・写真



by Kinbe & Ryo

た基礎的なクラスやサポート含めて、総合的に考え直さなければいけないと思っています。

中学校とは現在相談中で、障害児だけのクラス（特別学級）をつくり（場の統合）インテグレーション）、そこからたとえば美術などの教科を学びに行けないものかなどいろいろ考えている。

中学の学びの能力差は大きい。そこで担任制や手厚い教員体制とカリキュラムが保障できない。この「インクルーシブ教育」形態はとりくめない。フィンランドでもまだ新しいこのとりくみは相当なモチベーションがないとできない。どうしたら子どもたち一人一人の能力を育むことができるのだろうか。

いま、校長の最大の悩みであり課題なのだ。でも彼の話はとまらない。

*

「10年後には中学校のいまのような「教科担任制」などの編成も変えなければならなくなるだろう。障害児が担任できるような教育を受けた教員が中学にもぜひ必



▲ベテランのカイヤ先生



▲校長は一人ひとりと下校の握手



▲教室の入口にあった作品
▲教室の入口にあるコート掛け

「ようこそ、はじめての方！」とパソコンと音楽大好きの校長はおどける。

オーロラ小学校の訪問は3度目だ。子どもたちは6年生になった。ダウン症の彼と彼女が4人、自閉症の彼が1人、教室には2クラス合同で26人。副校長とベテラン教師が担任で、アシスタント2人も6年間ずっと担当している。

「ドラマ・シアター授業」はだれもが参加できる授業法だ。でも、教科書がわからないと、アシスタント教員がしっかりついて、2年生などの教科書で個別の学習もしている。

*

この子らが来年、別の中学校に進学する。

校長が語り始めた。

「中学校に行ったら障害のある子の教育で、問題があることがわかった。中学は教科ごとの担任制になるので小学校のような「クラス」がない。学科ごとに生徒が教師のところに行く方式だ。するとここ（オーロラ小学校）と同じやり方ができない。この子らを含め

要だ。

学校は、いっしょになにかをやる、それが一番大事だ。学びつつ楽しんで、喜びを感じていく。その結果、学力が上がればよい。人生の基礎をつくるのが大切なんだ。

そして校長は、全校演劇発表会で主役となったダウン症児のアーポクんの映像を（主演は校長、助演が担任のベテラン・カイヤ先生）とても嬉しそうにわたしたちに見せてくれた。

■オーロラ小学校

フィンランドの首都ヘルシンキに隣接したエスポー市（人口22万人、携帯電話のノキア本社がある）にある。全校生徒329名、教師21名、アシスタント11名。給食、看護婦、心理職、ソーシャルワーカーがサポートする。演劇教育に力を入れていて、机上の勉強だけではなく、一緒にアクティブな活動にとりくむ。特別な支援が必要な子が30名学んでいる。

校長は、「大事なのは教員の確保だ」と力説した。